

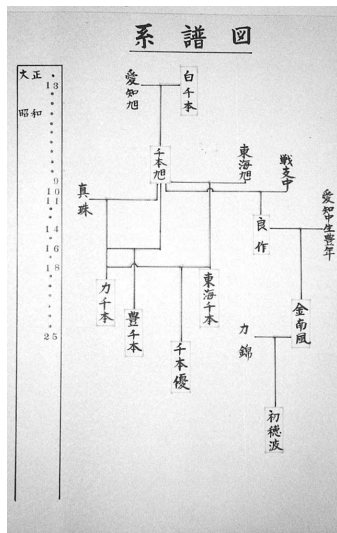
⑬ 岩槻信治Ⅱ
いわつきのぶじ

岩槻信治は、病床中に口述筆記した小冊子『私の一生』で、「私に、もし動かすべからざる業績があるとすれば、それは米の品種改良の外にはないと思います」と述べている。それほど稲の品種改良は、岩槻が情熱をそそいだ一生の仕事であった。

一九一一年（明治四四年）岩槻二十三歳のとき、大阪府内の国立農事試験場畿内支場で育種技術を学び、それから稲の品種改良に取り組むことになった。愛知県内のあらゆる品種を、三年がかりで集め、それぞれの特性を調査したうえで、どの品種が有望かを見定めてから、「京都旭」と「竹成」を交配して「愛知旭」を作り出すことに成功した。一九二四年（大正一三年）のことである。一つの新品種を作り出すには九年という年月がかかるという。愛知旭は、もみがこばれにくく米質がよいということで、各県の奨励品種に選ばれ、全国二位の作付面積を持つほどになった。続いて作り出されたのが「千本旭」であっ

た。愛知旭と「白千本」を交配したもので、草丈は低いがイモチ病に強く多収（一反で六、七俵）ということが評判となって、全国四位にランクされるほどになった。なかでも「金南風」は、一九五八年（昭和三十三年）から一九六一年（昭和三十六年）の間、全国一位であった。岩槻が作り出した新品種は、実に三十有余を数えるという。山崎延吉は、冊子『岩槻君を偲ぶ』の冒頭で「稲の品種改良については、東に寺尾博あり、西に岩槻信治ありと唱えられたことは、その道の人であれば夙知のことである」とほめたたえている。

岩槻は、稲の品種改良ばかりか、稲作改良にも関心を寄せ、稲の生理に適合した栽培法を説くようになる。特に施肥の仕方、品種の選択、苗代の作り方、田植法、病虫害の防除法など、どこをどう改良すれば、それが稲の増収につながるかを講演の席や実地指導の場



品種改良系譜図 (愛知県農業総合試験場安城農業技術センター)

で説明した。例えば、田植えにしても、たくさん植えれば、それでよいというわけではなく、苗を一本植えた場合は、五株に増えるから三本から五本植えくらいが適当で、無効分けつが少くないというのである。植え方にしても正条植えがよく、正条植えにすれば分けつがよくなるばかりか作業（草取り・中耕）がしやすくなるという。稲の開花にしても、穂が出ると花は一回開くだけで一度に咲くように見えるけれども、そうではなく、出穂した穂の上から下へ数粒ずつ開花していくという。だからこの時期は田に水をはるようになりたいというのである。岩槻は、このように稲の実証的栽培法を説き続けた。地元農家では、岩槻の指導を受けて稲の栽培に取り組んだことから、米が増収されることになり、日本デนมーカーの経済的基礎を強化することになった。

ほかに農事試験場の農具部では、牛耕に適したすきの改良、回転除草機の考案、動力脱穀機の開発など、まだ田植えと稲刈りの重労働からの解放はされなかったが、過重な農業労働の省力化を図る農具を工夫し、普及に努めていた。

文 神谷素光

本連載の監修者で、執筆者の一人でもあった神谷素光氏が、5月10日に逝去され、本編が遺稿となりました。謹んでご冥福をお祈りいたします。